

行動化様態の異なる窃盗非行少年の自我機能評価

— ロールシャッハ・テストを用いた2事例比較 —

川 畑 直 人

Ego Function Assessment of Delinquent
Boys with Different Acting-Out Modes

— A Comparative Case Study Using Rorschach Analysis —

KAWABATA Naoto

I はじめに

本論文は、行動化 (acting out) の様態が異なる窃盗非行2事例について、非行者の自我機能の比較をロールシャッハ・テストの結果と合わせて行なうものである。

非行行動を行動化という範疇に含めることについては、概念上整理すべき問題が残されていないわけではない。S. Freud (1914) がはじめて行動化という用語を用いて以来、この用語は概念の拡張・変遷を経て、現在では非行・犯罪・自殺・薬物嗜癖などの問題行動一般を指し示すこともある。精神分析学内部では、こうした概念の拡張傾向に対しては批判的見解も多い。例えば、A. Freud (1968) は、分析治療状況で起こる行動化は抑圧の弛緩によって起こるものであり、イド支配型的人格構造上の問題を持つ行動化患者 (嗜癖者、犯罪者等) の行動化と区別すべきであるとしている。しかし一方では、精神分析的治療の対象が神経症圏以外の患者に拡大する経緯もあって、分析状況への反応に限定することなく、行動化型の患者の人格理解と治療上の扱いについて議論がなされるようになってきていることも事実である。また、非行に関して言えば、非行行動の背後にある無意識的動機や非行行動そのものが持つ象徴的意味にまで視野を広げる上で、行動化という精神分析学上の概念が果たした役割は小さくないのである。本論文では、非行行動一般を行動化という視点からとらえるが、総括的な行動化概念では個々の非行の独自性を見落とすことにもなるので、むしろその様態の違いに焦点を当て、人格の構造的特徴との関連を検討することを目的とする。

II 問 題

非行行動の様態を分類する基準はさまざまであるが、臨床的には非行の深まりの程度ないし進

み具合が問題とされることが多く、柏熊（1965）の犯罪成熟過程、安倍（1974）の非行深度と
いった段階分けの試みもなされている。例えば後述する事例 A は、初発時の非行から手口が発
展し、被害者が保護領域外に拡大するとともに、頻度も多数回に及ぶなど、一般的には常習化し
た非行と行うことができる。安倍の分類に従えば、おおむね第Ⅰ深度から第Ⅱ深度への深化が起
こっていると見えよう¹⁾。このような非行の進展という問題も含めて、行動化の様態の違いを、
より力動的な観点から明確化することは、有用な視点であると思われる。

Winnicott（1965）は、反社会的な行動のなかに、発達上の愛情剥脱体験に由来する①時を与
え、関心を示し、記憶してくれることを求める要求（窃盗）と、②休息し、くつろぎ、安堵でき
るために必要な程度の構造的強さをもつ機構と復旧への期待（破壊行動）が含まれていることを
指摘している²⁾。しかしその一方で、反社会的行動が二次的の疾病利得となるにつれ、罪障感が失
われていくことも指摘しており、この点は非行の進展と常習化の問題を考える上で見落とせない
点である。すなわち、非行の進展や常習化にともなって、非行が初期に持っていた意味は次第に
薄らぎ、別の意味を帯びてくると考えられる。

問題行動が家庭などの保護領域から離れ、より広く社会的な場に広がっていくのは、青年期に
顕著にあらわれる傾向である。この点を考えるうえでは、Blos（1962）の青年期の自我発達理
論が参考になる。彼は、青年期の分離・個体化過程を、両親表象からの脱備給と自己愛的万能感
の高まりとして記述している。被害者が保護領域外に拡大する過程や、不良集団との関係が深ま
る過程は、親からの独立と生活空間の拡大という発達の变化に不随して起こるものであるが、両
親表象からのリビド―撤回という精神内界のプロセスをみることによって一層よく理解できるも
のと思われる。

非行の進展を見ていく上で有益なもう一つの視点として、Friedlander（1947）の指摘した、
敵意の一般社会への転移がある。すなわち、常習犯罪者は両親との間でサディズム的・マゾヒズ
ムの対象関係を結び、やがてそれが一般社会に対して転移されるというのである。これは非行に
対する社会の側からの反応によって一層強化されることになる。そして、大人や社会に対して転
移された敵意や反感は、自己の非行を正当化する手段にもなり、反社会的行動を自我親和化する
のに役立つことになるであろう。

このような精神内界のプロセスを見ることによって、初期の段階の非行と常習化した段階での
非行とでは、非行行動に至る非行者の精神力動そのものが異なる点、また行動化の様態が違っ
ていく点などについて理解が可能になっていくと考えられる。以下2つの事例を取り上げながら、
この点を具体的に比較・検討していきたいと思う。

Ⅲ 事例の検討

比較の対象とする事例として、児童期からの問題行動歴を持つ常習化している事例（事例 A）
と青年期に至って無意識的葛藤を背景に初発した事例（事例 B）の2事例を取り上げた。窃盗非
行の事例を選んだのは、①常習化の程度が異なる同種の非行を比較したかったこと、②窃盗は最
も一般的な犯罪であると同時に、常習化した場合予後が悪いとも言われており、その説明は臨床
上の要請も高いと考えられること、の2点からである。また、集団への同調性や集団への同一視

といった要因を排除するために、基本的に単独犯の事例を選択した。

まず、簡単に生育歴・問題歴を提示することにする。

〈事例 A〉

17歳。男。両親はAが幼少の頃に離婚。Aは祖父母のもとに預けられたが、小学校高学年の頃から家財の持ち出し、万引きがはじまり、預けられた家でも養育に手を焼き、施設に預けられた。中学時代には、車上盗を友人から教えられる。中学卒業後、施設を出て、実父と暮らすようになったが、就職をしないまま、数年の間、日中一時停車中の車を物色し、車中から金品を盗むという手口で窃盗を繰り返していた。共犯がある場合もあったが、基本的には単独での犯行である。共犯となった者以外に友人はほとんどなく、交友関係は狭い。

外見的には無口で、少し陰気な印象を与える。非行の内容について淡々と語り、感情はあまり伴わない。あからさまではないが、大人に対する不信感や反発心を感じさせる。

〈事例 B〉

18歳。男。両親と同胞3人の5人家族。父親は小規模な工場を自営。道徳的に厳格な両親のもとで育ち、交友関係は親同志が知り合いの幼なじみを中心。高校に入学するまで全く問題行動は見られなかった。高校1年時、将来の進路のことで親と意見が合わず、生活全般に無力感を感じるようになる。その頃、ふとスリを思いつきスーパーマーケットで買い物客から財布を抜き取った。しかし、自分の行為に強い罪障感を持ち非行は1回きりでやめていた。高校卒業後、稼業の手伝いをしていたが、たまたま買物にいった際、同様の非行を行い店員に発見された。

礼儀正しい好青年という印象を与える。応答もきはきとしている。家族に対しては済まないことをしたという気持ちが強い。

事例Aの公認されている最初の非行は、小学校高学年から始まった家財持ち出しである。両親の離婚後、祖父母に預けられ、しかも祖父母からも十分な愛情を注がれなかったという愛情剝脱体験を経ての非行であり、その当時の非行は愛情獲得の代償的な満足と、養父母に対する反感・敵意を土台として発生したものと考えられる。その後非行は近隣店舗での万引き、一般路上での車上盗へと進展し、養育者とのその時々との関係に左右されることなく、ほとんど生活の一部となっている。こうした非行性進展のプロセスは、多くの常習窃盗非行者が共通してたどる道筋である。そのなかで、非行の被害者は保護領域から一般社会へと拡大し、そして非行行動自体はより自我親和的なものになり、常習的に反復されるようになると言われる。

先に触れた、Blos (1962) の観点に照らしてみると、この事例においても非行が保護領域外に拡大したのは青年期に至ってからであり、家族からの自立という青年期特有の欲求と無関係ではなからう。しかし、事例Aの場合、正常の発達過程と比べて二つの点で特殊性が指摘できる。第一は、家族からの自立あるいは離脱が、発達のレディネスのもとで起こったものではなく、養育環境側の崩壊によって起こらざるを得なかったという点である。第二の点は、より本質的な問題と思われるが、自立にともなう両親表象からのリビドーの撤回という過程が、本当に存在していたのかという点である。リビドーの脱備給は、それ以前に備給状態があったことを前提としてお

り、もともと両親との間で心理的絆が結ばれていない場合には、脱備給すべきリビドーがはじめから対象に向っていないことの方が問題である。非行の深刻な常習化、臨床像にみられるラポールの取りにくさ、非行を反復する以外は、パチンコをするくらいといった、社会的活動への無関心、無気力で利他的な生活状態は、自己愛的病理がより重篤であることを思わせ、より早期の対象関係の発達過程における問題を示唆するものである。

事例 B は、青年期に至って初発した非行である。手口の発展、頻度の増大はみられず、一過的な非行に終わる可能性のある段階、あるいは常習化する余地を保留して考えるとしても現時点では初期的な段階にあると言えるであろう。非行を誘発するような外的条件（交友関係、家庭の解体等）は見当らず、動機は初発時、再犯時ともにあいまいである。ここではまず、時間的に近接している再犯時の非行から考えてみたい。

再犯の起こったスーパーマーケットに赴いた当初、Bにはまったく窃盗の意思はなく、この事件はBにとっても家族にとっても不可解な出来事であった。その中で注目されるのは、非行が発覚して補導されたことによって、B自身はむしろ安堵感を覚えるといった感情状態の不釣り合いが見られたことである。本人によれば、補導されるまでは、最初の非行を家族に隠していたということで、むしろ気が重かったという。実際、補導されてからのAの挙動は毅然としており、また表情もすがすがしいのである。非行（犯罪）を起こすことによって、現実の処罰を受け、無意識の罪障感を軽減させるといった機制を最初に記述したのは、S. Freud (1916) であるが、Bの再犯には同様の機制をうかがわせるものがある。

再犯時に比べると、初犯時の非行発生機序はより複雑であり、また、家族からの情報が不足していることもあって、非行の解明は難しい。ただ、いくつか重要な情報が本人によって報告されており、それを手がかりに見ていくことにする。

まず第一に、当時Bは、自分の将来の進路のことで両親、特に父親との間で意見が合わず、家族との間で心理的な葛藤状態にあった。こうした葛藤は、家族からの自立を指向する青年期にはありがちなものではあるが、幼少期から両親の価値観に疑いを持たず、交友関係も似たような価値観を持つ者に限定されていたAの場合、このような両親との確執はあまりにも未経験の重すぎる問題であろう。そのためBにとって、対処の難しい困難な事態を引き起こしたものと思われる。こうした葛藤と緊張の負荷のもとに、両親への愛着と反発、あるいは敵意ともなう罪障感を意識体験としてかかえることができず、行動化に至ったのではないかと考えられる。窃盗という両親の価値観に真っ向から抵触する行動をとったという点では、非行行動のなかに両親に向けられたある種の意思表示が、無意識的であるにせよ、含まれていた可能性がある。したがって、非行が公にならず、両親に知られなかったことは、非行が本来の目的を全うせずに終わったことを意味し、数年を経て再犯に至ったことは、こうした点から理解してみることも必要かと思われる。

当時の状況を語るなかで、Bは両親と意見が合わなかった事実は認めるものの、父親に対する敵対心や反発心を意識することは難しい様子であった。その話題になると、最後には「父親は尊敬できる人。」「父親は自分を理解してくれる。」と、父親のよい面をしきりに強調して、自分の非を咎める傾向があった。しかし一つだけ当時の生々しい回想として、「当時、何をやっても手につかず、投げ遣りな気持ちに支配されていた」ことが報告された。それは、Erikson (1959)

が記述した時間的展望の拡散、労働麻痺といった自我同一性拡散の兆候を思わせるものであり、おそらくそうした拡散状態のなかで現実検討、判断、欲求の遅延能力などの自我機能は一時的にしろ退行していたのではないかと考えられる。

両事例を比較してみると、第一に、事例 B の非行は無意識的な欲動や葛藤に強く彩られているのが特徴であり、事例 A の常習化した非行が、そのような欲動や葛藤から非常に距離があり、言わば葛藤が意味を持っているとは受け取り難い非行であるのと好対照をなしている³⁾。第二に、両事例とも非行発生時の生活状況には、無気力、刹那的といった同一性の拡散状態がみられる点は共通している。しかし、事例 B の場合、学校生活への適応は維持されるなど、拡散状態が一時的、部分的なものにとどまっているのに対し、事例 A では慢性的、全般的に見られる点が大きな違いである。以上の点をまとめると、事例 A の非行が、慢性的、全般的な自己愛的状態のもとでの自我親和化した非行行動の反復と考えられるのに対し、事例 B の非行は、一時的な同一性拡散状態での内的欲動・葛藤に支配された行動と考えられる。

このような行動化様態の違いは、心理療法過程の中で転移状況によって再活性化される内的メッセージ性の強い行動化と、治療関係とは直接かかわりを持たない行動上の問題との違いに照合してみるとできよう。はじめに触れた A. Freud (1968) の分類もこの点と重なりを持っているが、彼女の言うように人格構造との関連が存在するかどうか、当然関心の対象となってくる問題である。そこで次に、人格構造に焦点を当てて両事例の比較を試みたいと思う。

IV ロールシャッハ・テスト資料

人格の構造的理解については、精神分析的自我心理学において知見の集積があり、ここではそのような知見を踏まえ、人格の中核的執行機関である自我の機能を中心に見ていきたいと思う。具体的な自我機能の評価にあたっては、自我機能を反映する代表的な投影法検査であるロールシャッハ・テスト（以下ロ・テスト）を用いることにした。

以下、両事例に対して施行したロ・テストの結果を提示し、それぞれの反応特徴を要点的に分析することにする。尚、テストはいずれも筆者が少年鑑別所で行なったものである。スコアリングは Klopfer 法 (Klopfer, Ainsworth, Klopfer, & Holt, 1954) に従うが、日米で標準化の母集団が異なるため平凡反応の採点は省略した。

1. 事例 A

(1) 事例 A のロ・テストの結果

事例 A のロ・テストのプロトコルとスコアの集計表を表 1 に示す。反応領域は Klopfer の領域番号によって表すが、一部のわかりにくい反応についてのみ、領域図 (図 1) を加えた。

(2) 事例 A のロ・テスト解釈

ロ・テストの解釈は、まず (a) スコア全体の特徴を述べたうえで、事例 A の反応特徴をよく表していると考えられる (b) 内容の空疎な形態水準の低い反応、(c) 主体の確定しない運動反応という 2 点を取り上げ、考察を加えたいと思う。

(a) スコア上の特徴

川畑：行動化様態の異なる窃盗非行少年の自我機能評価

表1 事例Aのロ・テスト・プロトコルおよびスコアの集計

カード I		
10" 15"	思ったこと言うんですか? 1. チョウ。 dr F A -0.5	形が。〈どういう風に〉こうやって、飛んでるところを上から見た。(手を広げる。)(図1参照)
20"	2. トンボ。 dr F A 1.0	これが羽で、これも同じく飛んでるところ上から見た。〈チョウと?〉ほとんど一緒です。
24"	3. セミ。 D F A 1.0	セミはパッと見て何となく。真ん中の形が。(D ₁)
35"	4. 幼虫。 D F A 1.0	幼虫も同じような。真ん中が似ていた。(D ₁)
45"	何も見えない。	
カード II		
13" 55" < 1'40"	1. 犬が2匹。 W FM A -0.5 (首を振って、図版を伏せる。)	この辺が目が見えた。こうやって手を合わせていて、立っている。横向きに向けて、足、これは何やったか覚えてへん。何かと思ったけど。 (描画を求める。図1参照)
カード III		
10" 20" 25"	1. 踊っている。 W M→F H 1.0 2. アヒル。 D F Ad 1.0 (首を振って、図版を伏せせる。)	これも横向きで、向かい合わせになっている。顔で、手、体、足。これから踊ろうとしている。〈踊ろうとしているというのは?〉何となく向かい合ってる感じで、踊っているという感じはしない。 頭。胴。〈足とかは?〉足とかは感じなかった。こんだけの部分。(D ₀) 〈アヒルと思ったのは?〉顔の口みたいな。出っ張ったみたい。
カード IV		
10"∧ 19"∨ 25"	1. 熊…の後ろ姿。 W F A 1.0 2. 木。 dr F Pl 1.0	何かここに威圧感感じた。ここが足が大きいから熊かなと思った。これ(D ₁)関係なしで、〈後ろ姿?〉ただ何となく。 枝がこれで。この辺とか別に目に入らなかった。(図1参照)
カード V		
10" 15" 18" 24"	1. 鳥。 W FM A -0.5 2. カマキリ。 W F A -0.5 3. バッタ。 W F A -0.5	上から見て飛んでいる姿。触角か何かと思う。羽。これ(d ₁)以外のところで。 カマキリは何となく。〈全体?〉全体。〈何から思いついたの?〉この形から。 飛んだときの。飛んだときにこういう形になる。これ、えー。足かなこれ。後は鳥と一緒に。

京都大学教育学部紀要 XXXVIII

表1 事例Aのロ・テスト・プロトコルおよびスコアの集計(続き)

カードVI		
20" >	1. 亀が頭を出している。 W F A 1.0	ちょっと首(D ₃)が長いんやけど、何となく亀の頭に見えた。この部分(D ₁)があつて硬いやつ。これはぬき(d ₂ を除く)。
20"		
カードVII		
18"	何も思い浮かばない場合には? …もういいですか? <もう少し見てくれる?>	
50"	1. 日本の地図のように見える。 これ。 D F Map 1.0	これ見てへんかったけど。北海道で(D ₂)、この辺が青森で(D ₁ の上端)、この辺が関東らへんで途切れているような感じ(D ₁ 中心部)。
1'00"		
カードVIII		
10"	1. 猫が2匹。 D F A 1.0	こう(<)見た感じで。胴体。顔。足で。で尻尾がこの辺。(D ₁)
55"		
カードIX		
15"	(顔に近付けてみる。)	
25"	1. 笛を吹いている。 D M H 1.5	このオレンジの。この部分が何か笛に見えた。これが何か長い帽子で。これは感じなかった。このオレンジだけ。(D ₂)
54"	2. 鼠。 D F A -0.5	この辺顔で、後は胴体の感じ。この辺に目があって。<手足?>感じなかった。(図1参照)
56"		
カードX		
8"	1. クモ。 D F A 1.0	この青いやつ。これが足に見える。(D ₁)
15"	2. ゴキブリ。 D FC' A 1.0	これ2匹。この辺かな。これが足で、これが触角。で、色が黒いからそう思った。(D ₄)
38"	3. 落葉。 D CF Pl 0.5	色がそんな感じやった。形とかも。(D ₁₁ , D ₁₃ , D ₁₅)
42"		

R = 20 F = 14 H = 2 Map = 1
W = 7 M = 2 A = 14
D = 10 FM = 2 Ad = 1
dr = 3 FC' = 1 Pl = 2 CR = 5
CF = 1

like card II かわいらしい
dislike card X クモが

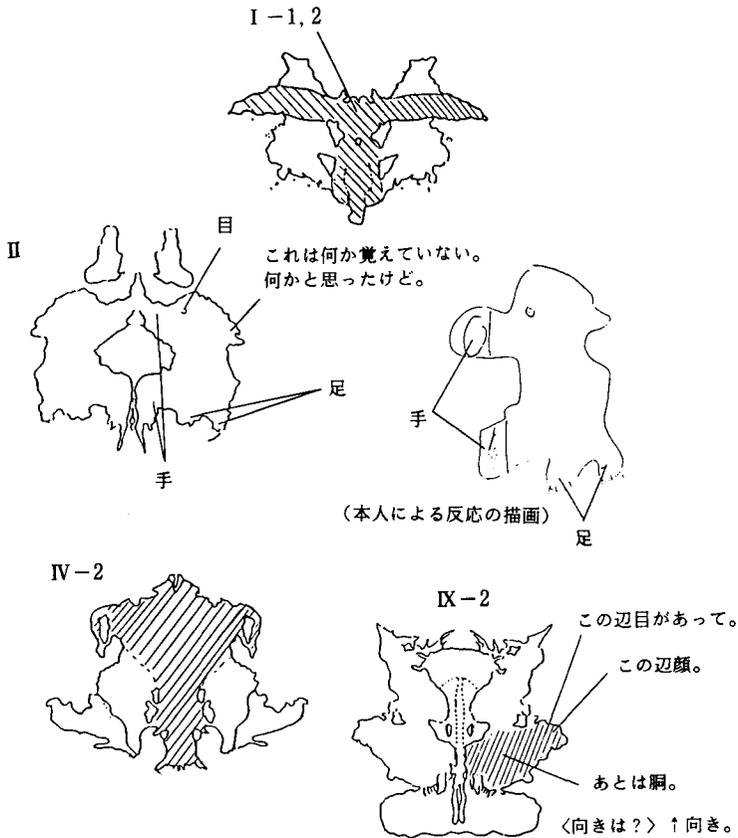


図1 事例Aのロ・テスト領域図

R=20であり、鑑別所での資料(川畑・河合, 1987)と比較して決して少ない方ではない。しかし、同一知覚ユニットでの概念の言い換えによって反応数を稼ぐ結果となっているところがあり、生産性が高いとは言えない。またF%=70%, A%=70%, 平均FL=0.5と、決定因、内容、形態水準のどれをとっても、質的に低水準の反応が多い。領域では、dr反応が3つ出ており、強引で恣意的な外界の把握が見られる。体験型はほぼ収縮型と言ってよい。運動反応はMが2つであるが、反応様式がやや特殊であり、その点については後で詳しく述べるつもりである。色彩反応は、X-3だけで、しかも精気の乏しい色彩の小領域に反応しており、情緒刺激に対するかかわり方が消極的である。

(b) 内容の空疎な形態水準の低い反応

事例Aの特徴としてまず挙げられるのは、全般的な形態水準の低さであろう。I, II, V, IX図版で-0.5水準の反応が出現しているのをはじめ、最高でも1.5を上回る反応はみられない。I図版やV図版では、同じ知覚のユニットで、思いついた内容を吟味せずに羅列しているといった反応パターンがうかがえる。さらに、質疑段階においても、概念と形態を対応させる努力が非常に乏しいために、まったく形態の説明が行なわれなかったり、またII-1の犬の反応のように、

手と脚について矛盾した指摘を行って、マイナスの形態水準をつけざるを得なかったという反応が見られる。内容面をみても、動物反応、特に虫反応が多く（虫反応率=40%）、豊かな想像力を感じさせないものになっている。「虫」と潜在的に同一化している可能性のある自己像の在り方、それだけに未成熟性、また卑小性を抱えた自己像を考えてみなければならぬところであろう。

川畑・河合（1987）は非行少年の平凡反応の特徴を分析し、図版全体のうち形態が明瞭な部分のみを取り出し、無難な反応をする傾向を見い出しているが、本事例においても、そうした吟味と精緻化の乏しい反応傾向が顕著である。また、内容的にも、動物反応、特に虫反応の多さが目立ち、非行少年の反応特徴を示している。通常、こうした反応傾向は形態水準の高い反応を生まない代わりに、極端な形態水準の低下も生じにくく、1.0レベルの反応に終始することが多いが、事例Aの場合、形態水準の低さはかなり深刻であり、反応生成過程における知覚過程と連想過程の噛み合い方（gearing）（Rapaport, Gill, & Schafer, 1968）がきわめて粗雑であることが示唆されている。

このような知覚—連想過程の粗雑な噛み合い方は、注意の持続力、葛藤の内的保持力の乏しさを反映するもので、欲求遅延能力が非常に未熟であることを示唆している。同時に、外界への現実感を伴った関わりへの乏しさ、内的欲動や感情の自覚のあいまいさがうかがわれ、外的環境や他者に対してきわめて表層的な関わりしか持たず、時には現実吟味を欠いた不適応の状態に至る可能性が示唆される。また、質疑段階での説明能力の低さは、論理的な思考力や言語化能力の乏しさをあらわしており、欲動を内的に体験したり言語化することができないまま、短絡的に行動化しやすい傾向が推定される。

（c）主体の確定しない運動反応

運動反応はⅢ図版とⅨ図版に見られるが、いずれも自由反応段階で運動の主体が言及されず、「踊っている」、「笛を吹いている」というように運動だけが反応として述べられている。反応主体が確定しないままでの運動への言及は、色彩反応で言えばCFやC反応に対応するものと考えられよう。すなわちプロットの形態に人間の運動を知覚しながらも、その印象を運動の主体や状況の概念と結合することができなかつた反応と考えられる。こうした反応特徴は、すでに（b）で指摘したような、欲求遅延能力の障害と、秩序だった思考力の欠如のあらわれであると同時に、潜在的に共感能力を有しながらも、それを社会化された表現にまで高めることが難しいことを示唆している。

尚、このような反応は、一見すると直感的で強い運動感覚を伴うもののようにも見えるが、Ⅲ図版の反応では質疑段階に決定因として運動感覚が否定されており、自分自身の内的欲求や感情がともに漠然と体験されるにとどまっていることが示されている。

2. 事例B

（1）事例Bのロ・テストの結果

事例Bのロ・テストのプロトコル、スコアの集計表、領域図を表2、図2に示す。

（2）事例Bのロ・テスト解釈

事例Aと同様、（a）スコアの全体的特徴を述べた後、（b）V-3にみられる形態水準の低下、

川畑：行動化様態の異なる窃盗非行少年の自我機能評価

表2 事例Bのロ・テスト・プロトコルおよびスコアの集計

カード I		
10"	エー ウン 1. 動物の顔 Ws F A 1.0	これ全体的に見て。耳、目。これが歯。歯っていうか口。〈何の動物とかある?〉何となく。動物っぽい感じ。
20"	2. あと、こう人が二人こう向かい合っているみたい。 そんなんかな。 W F H 1.5 〈他には?〉	これ頭 (d ₁)。手、足があって、これなんか羽 (d ₂) のついたような人がこの両側に。〈顔?〉へこんだ目と鼻。 (D ₂ +D ₂)
1'40"	ウン。あんまり思いつかない。	
カード II		
13"	1. 人がこう手を合わせている。 (図版を見ながら左手をのばす) W M H 2.5	これがやっぱり手 (d ₁) で、しゃがんでいるって感じかな。こう頭 (D ₂) があって、これ目と口。白いところ。で足。〈しゃがんでいるというのは〉この出るところが膝。
55"	2. この真ん中の白い部分が飛行機が飛んでいる。 SD Fm, CF Obj, Fire 1.5	翼で、前の方で。こう火 (D ₁) 噴きながら飛んでいるみたい。よう宇宙船みたい。
1'40"	後は、あんまり思いつかない。	
カード III		
20"	1. これは何か女の人が、何かを持ち上げようとしているところ。 W M H, obj 1.5	顔で、ここ足で、手で、これが胸という感じ。〈持ち上げているというのは?〉これが何か荷物みたいな。荷物って言うか何か。
53" V	2. この部分が何か昆虫の顔みたいな。 D F Ad 1.0	この部分がこれ目って感じで、何かカマキリみたいな感じが。頭が。〈カマキリというのは?〉何となく、こう逆三角形の。目が大きい。(D ₂)
1'30"	3. これが何か火の玉みたいな (笑い) 感じがする。 D mF, CF Fire 0.5	これなんかヒューと飛んでいくような。よくテレビとかでやっているような。これスルスルスルって飛んでいくような。(D ₂)
1'45"	そんなもん。	
カード IV		
15" ^	1. 何か大きな動物っていうか。熊みたいの下から見ている感じ。 W FC' A 1.0	こう足があって、頭。こう手。ちょっと頼りない手だけど。どっちかと言うと後から見るような感じ。〈熊というのは。〉この色と、頭の感じとか。〈後向きと思ったのは〉これが背中感じがするのと、この頭の部分に頭がないっていう。
25" V	2. 恐ろしい。何か、その皮の敷物みたいな感じ。 W Fc Aobj 1.0	〈恐ろしい?〉言っていないと思います。その熊の敷物みたいな。最初見たとき。熊が立っているみたいに見えた。でよく見ていると熊のペローとした。だから熊の皮をのばしたやつかなと。〈敷物とかペローとしたとか見えたのは?〉頭の辺がこういう感じ言うか。

京都大学教育学部紀要 XXXVIII

40"	3. んと。大きな木のような。 W F Pl 1.0	この真ん中のやつが木の幹 (D ₁) で。この葉っていうか、枝に葉。なんて言うか、クリスマスツリーみたいな感じ。
60"	うーん。そんなもんかな。	
1'25"	そんな感じ。	

カードV

7"	1. これはチョウチョが、羽をバタバタやってやっているみたい。 W FM A 1.0	こっちが頭の方で、尻尾の方で、これ羽。真上の方じゃなくて、ちょっと斜めから見たような〈?〉なんて言うのこう後上からって感じ。〈羽をバタバタというのは?〉斜め上からみたら、下がっている感じ。
30"	2. あと女の人が、何か裾の長いドレスはいているみたい。 W M H 1.5	半分で見たら。頭。顔。胴。足。すその長いドレス。どっちか言うと、女の人が抱き合っているというか。ここが手みたいに見える。(図2参照)
55"	3. うんと。なんちゅうの。蟬みたいな。蟬の頭みたいの。蟬と言うか昆虫の。 W F Ad 1.0	ここはなしで、少しふくらんでいるのと、目があって。この下が胴体になる。(図2参照)
1'15"	うん。そんなもん。そんな感じ。	

カードVI

20">	1. これ横向きに見たら。船が通ってて、それが水んとこに映っているみたい。 W Fm Obj 2.0	これ船の胴体。煙突。なんちゅうか、人の乗るようなところ。それが下に映っている感じ。
55"	2. あと、こうちょっと変やけど。桶みたいの。横から見た。これがなかったら。 W F Obj 1.0	こう持つところを横から見たら。ここは別にどうでも。ここを取ったら。(図2参照)
1'35"	それくらいかな。 はい。	

カードVII

10"	1. 人の顔が、人の顔が向かい合わせになっているみたい。 D F Hd 1.0	これ顔。鼻と口。(d ₂ を除いたD ₃)
35"	2. 全体的に見て、人の顔に見えて、胴体のところが犬の体みたいの。 W F HA 1.0	さっきの顔に、ここが体で、ここが手で、こう手を出して立っているみたい。うしろ向いている。
55"	3. あと全体的に鹿の角みたいな感じ。 W F Ad 1.0	こう全体的に見たら、かたち的にそう見える。
1'10"	そのくらい	

カードVIII

10"	1. うーん。動物が何かを登っているように見える。 W FM A 1.0	これが動物 (D ₁)。足、頭、ちょっと出てるのが尻尾。
-----	---	--

川畑：行動化様態の異なる窃盗非行少年の自我機能評価

45"	2. これ全体が、色がカラフルで、なんちゅうか。マークみたい。 W C/F Emb 0.5	形。こう色が仰山あって。ようプレザーについているようなマーク。〈動物の形とは?〉関係ない。〈抽象的な?〉はい。
1'10"	うん。そんなもん。	

カードIX

15"	1. この真ん中の辺が、馬の鼻に見える。 DS F Ad 1.0	この辺。真ん中の筋のような感じも入れて (d ₂)
25"	2. この緑の的が骨盤の…(早口に)あの理科の実験とかで見てた骸骨の骨盤に見える。…あとは… D F At 1.0	骨盤ってこんな形やなかったかな。(D ₁)
1'13"	3. なんかがこう両側に、顔だけがある。 Ds F Ad 1.0	これが目で。動物のこう鼻が出てて。(D ₁)
1'30"	そんなもんかな。	
1'45"	4. あっ。ここに人みたいのが見える。笛みたいの吹いている。とんがった帽子を被った人っていうか、爺さんが。 D M H 2.5	(D ₂) トンガリ帽子。笛を吹いているような。膝。お尻。肩。緑のなんか (D ₁) に掛けているような感じかな。〈お爺さんというの?〉何となくそういう風に。
2'05"		

カードX

30"	1. ここの黒いのがダニみたいの。 D F (A) 1.0	ダニをイラスト化したような。目、角。〈ダニと思ったのは?〉テレビとかコマーシャルに出てくるダニのイメージがこんな感じ。(D ₄)
40"	2. 何かそういうのが集まっているような。何か小さいダニとか虫みたいのが。 W F A 1.0	これもそういう感じするし。ゾウリ虫 (D ₁₃) みたいな感じするし。これも何か虫に見える。
1'00"	3. ゾウリ虫みたいな感じ。何か。(笑い) D F A 1.0	
1'15"	というくらいしか、分からない。(笑)	
1'45"	うん。なんかこんなもん。(テスターを見て笑う。)	

R = 27 F = 15 H = 5 HA = 1
 M = 4 Hd = 1 At = 1
 W = 16 FM = 2 A = 6 Pl = 1
 D = 10 Σm = 3 Ad = 5 Emb = 1
 S = 1 FC = 0 (A) = 1 Fire = 1
 C/F = 1 Obj = 3
 C = 0 CR = 11
 ΣC' = 1
 Σc = 1

like bard VI 船っていう感じが好き
 dislike bard X ごちゃごちゃしている
 mother card VIII or IV 動物的なもんがある
 father card VI 僕にとって大きい存在・方向転換しないという感じ
 self card VII 動物っぽいところもあって、体は前向いているのに顔は背けるという性格

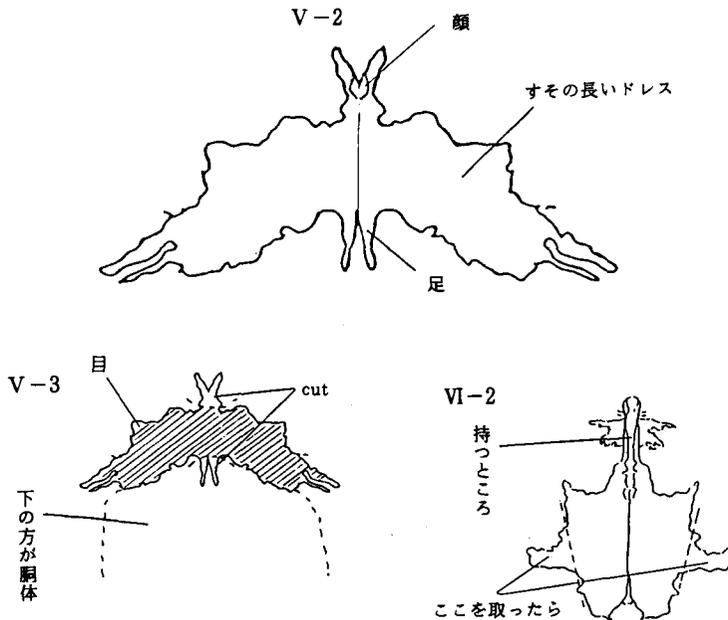


図2 事例Bのロ・テスト領域図

(c) 天然色図版での反応水準の低下, (d) 反応表象の特徴, の3点を中心に検討を加えたいと思う。

(a) スコア上の特徴

R = 27 と反応数は標準範囲内にある。F% = 56%, CR = 11 からも推定できるとおり, 決定因, 反応内容ともにバラエティに富んでおり, 平均 FL = 1.19 を合わせてみても知的水準が高く, 内的資質には潜在的に恵まれたものを感じさせる。体験型は, $M : \Sigma C = 4 : 1$, $FM + \Sigma m : \Sigma C' + \Sigma c = 5 : 2$ と内向性を示している。

(b) V-3 にみられる形態水準の低下

まず全体のなかで目を引く反応のひとつが, V図版のセミの頭という反応である。一方で明細化の行き届いた形態水準の高い反応が見られるなかで, この反応は独特の奇妙さを感じさせる。言われてみれば, 形態としては確かに顔かせるものがあるが, 昆虫の体節の一部を取り出してそれをプロット全体に当てはめており, ちょうど虫眼鏡で拡大視でもしたような大きさのアンバランスを感じさせる反応である。形態水準という点からみても, プロットの分節化の程度が低く, 大きさのアンバランスに対する自覚が乏しい。肉感的な感じすら与えるV-2の反応とは対照的に, 反応内容も半分物体化し生々しさが排除された反応である。同種の反応様式は, VII図版の鹿の角, IX図版の骨盤などにもみられ, 同一図版中の反応継起にこのような反応水準の推移(shift)が見られるのが本事例のひとつの特徴と思われる。

(c) 天然色図版での反応水準の低下

図版系列を通してみると, VIII・IX・Xの天然色図版において, 反応の水準が低下していること

が指摘できる。水準の低下は主に、D反応の増加に見られる反応領域の縮小、Ⅷ-2のC/F反応、Ⅸ-2の解剖反応の出現などにあらわれている。Ⅱ・Ⅲ図版ではさほど混乱を示さず、むしろ積極的に色彩を反応に取り入れていることから、彩色領域の範囲と色彩数が関係しているようで、プロット全体が多色刷りされているⅧ・Ⅸ・Ⅹ図版では、バリエティに富んだ色彩刺激を統合することができず、外界支配（mastery）の範囲を縮小せざるをえなかったものと考えられる。また、色彩反応はただ一つ恣意的色彩反応を出しただけであり、紋切型でよそよそしい情緒刺激への反応様式がうかがえる。Ⅸ図の解剖反応では、反応したあとに早口に個人的体験を持ち出して合理化を試みるなど、防衛機能の一時的失敗が示されている。その後、比較的持ちなおしたM反応が見られたことは、ある程度の回復力を感じさせるが、最終のⅩ図版を見るかぎり、反応の水準は十分に回復できなかつたものと思われる。

(d) 反応表象の特徴

M反応は4つあるが、反応表象の特徴として言えることは、いわゆる対人的親和欲求との関わりを感じさせる女性的なイメージが優勢であるということである。逆に、強い男性像や攻撃的なイメージは、反応表象のなかに取り入れられていない。なかでも、目を引くのはV-2の独創反応である。形態の正確さを犠牲にして、かなり濃い親愛的行為が投影されている。攻撃的側面が表象化されないという傾向は、IV-1の背中向きに見た熊という動物反応でより一層明確である。質疑段階に頭部を明細化しているが、後を向いていることの説明としては十分成功しているとは言えず、また次の反応の冒頭に述べられた「恐ろしい」という発言が失念されていることから、否認といった原始的な防衛によってこの図版の威圧的なイメージが排除されたのではないかと考えられる。人間像において女性的・親和的側面が優勢であるのと対照的に、Ⅱ-2、Ⅵ-1のような物体反応においては、男性的・攻撃的イメージが顕著であり、そうしたイメージは物体化・距離化といった防衛が完璧になされた上で反応生成に至っていることが分かる。mが見られることは、潜在的に欲求認知の可能性を示唆するものの、現時点では非常に意識から遠ざけられていると言って差し支えないであろう。こうした反応表象の特徴から言えることは、欲求認知、対人態度に大きな偏りがあり、自己の攻撃的欲動が活発な防衛努力によって意識から遠ざけられようとしているということである。また性同一性の発達という点でも、男性性の確立は未熟な段階にあることが示唆される。このような精神内界のアンバランスさは、Ⅶ、Ⅰ図版に見られる半獣半人像にもあらわれており、特にⅦ図版はセルフカードに選ばれていることから、統合されない自己感覚があるのではないかと考えられる。

V 自我機能の評価

以上のロ・テスト結果の解釈をもとに、両事例の自我機能の特徴の比較を行ないたい。非行者の自我の特徴については、Friedlander (1947), Redl & Wineman (1957) など、すでにいくつかの指摘がなされているが、ここではより総合的な自我機能の評価を試みるために、Bellak, Hurvich, & Gediman (1973) の挙げた12の自我機能を中心に、両事例の比較を試みたいと思う。Bellak, et al.は精神力動的な観点から自我の要素的諸機能を網羅し、①現実検討、②判断、③外界と自己についての現実感覚、④動因、感情、衝動の調節とコントロール、⑤対象関係、⑥

表3 2事例の自我機能の特徴

自我機能		事例A	事例B
① 外界と内界の情報処理に関する機能	現実検討	漠然としてあいまいな現実認知。	高水準の現実検討力がある。一時的に低下する可能性はある。
	思考過程	論理的思考力や概念化、言語化能力が乏しい。	特に障害は認められない。
	適応的退行	適応的退行はほとんど見られない。	自我の関与のもとでの創造的退行が可能。
	自律機能	注意持続力の乏しさ。	特に障害は認められない。
② 内外の刺激調節と防衛に関する機能	防衛機能	否認など原始的防衛の疑い。	距離化・知性化が優勢。部分的に否認も用いられる。
	刺激防壁	識いきが高い。外的刺激の影響を受けにくい。	識いきは低い。刺激の影響を受けやすい。
③ 行動などによる表出の調節と結果の予測（迂回と見通し）に関する機能	判断	判断力は乏しい。行動の無自覚な反復傾向がみられる。	特に障害は認められない。一時的に低下する可能性はある。
	感情・衝動の表出調節	欲求遅延能力の障害。	情緒刺激に対する紋切型の行動パターン。欲求遅延能力、内的な統制力はある。
④ 「はたらきかける」こと、「かかわる」ことに関する機能	熟達・有能性	環境に対して表層的な関わりしかみられない。	潜在的能力は高い。十分な有能感は得られていない。
	対象関係	共感性が乏しく、他者との情緒的交流が乏しい。	意識的には親和的態度が顕著。防衛操作による関係の希薄化がみられる。
⑤ 「存在(being)」と「(感情的)経験」にかかわる機能	現実感覚	心的体験世界の狭さによる安定。	自己像に不全感がともなう。
	総合・統合機能	各機能の統合的機能の不全。	攻撃性が未統合。

思考過程、⑦自我による自我のための適応的退行、⑧防衛機能、⑨刺激防壁、⑩自律機能、⑪総合—統合機能、⑫熟達—有能性という12の機能を挙げている。両事例の各自我機能の特徴を、ロ・テストの結果から評価し、簡単にまとめたものが表3である。なお、斉藤(1990)は、これらの機能を、①外界と内界の情報処理に関する機能、②内外の刺激調節と防護に関する機能、③行動などによる表出の調節と結果の予測(迂回と見通し)に関する機能、④「はたらきかける」こと、「かかわる」ことに関する機能、⑤「存在(being)」と「(感情的)経験」にかかわる機能という5つの群にまとめており、表3ではその分類に従って各機能を群分けして提示した。

プロトコルの解釈で触れてきたとおり、Aの事例では全般的に反応生成過程における連想過程と知覚過程の噛み合い方が粗雑で、形態水準が低いのにに対し、事例Bでは、形態水準の高い反応と漠然とした反応の差が大きく、水準が推移しやすい点が特徴的である。機能水準の全般的な低さと、機能水準の変動性というこのような対比は、現実検討、判断、感情・衝動の表出調節などで共通して見られる違いと思われる。

思考過程、自律的機能の問題は事例Aにのみ見られる。この二つの機能は、Hartmann (1936)が葛藤外領域の自我機能として概念化した機能に関わりが深く、また環境への適応上不可欠であるという点で、より基礎的な機能と考えられる。こうした機能にまで問題が及んでいるということは、事例Aの自我構造と機能のレベルが低く、「欠損」を思わせる面をかかえていることを示している。

刺激の調節と防護に関しては、事例Aが内界、外界ともに対して厚い防壁を張り、疎通性が極めて乏しいのに対し、事例Bは外界からの刺激の影響を受けやすく、一方内界に対する感受性そのものは潜在的に持ち合わせながら、活発な防衛操作によって防壁を維持しているといった精神内界の不均衡が特徴的である。この点で、事例Bの自我機能様式はより神経症水準の病理に近いのではないかと思われる。

行動表出の調節と結果の予測については、すでに触れたとおり、事例Aが全般的な機能水準の低さを示している。特に、欲求の遅延能力の乏しさはAのロ・反応の特徴を最も端的に表わしており、これまで挙げてきた各機能の障害すべてがこの欲求遅延能力の低さと関わりを持っていると言って過言ではなからう。

熟達・対象関係という点でも、事例Aのロ・反応は、全般的な機能水準の低さを示唆している。環境や他者に対して、深みのある濃密な関係を持つことはあまり期待できない。事例Bは、環境に対する熟達、自我関与の力を示しながら、一方で活発な防衛努力によって関係が損なわれる傾向があり、また対人的な欲求の認知と表出に偏りがあるのが特徴である。

現実感覚、総合・統合機能は、人格の統合性、自己同一性の感覚といった、これまで見てきた個々の諸機能を前提として、全体を束ねるようなより高次の機能に関連するものである。それゆえ、ロ・テストの結果も全体的な評価を行なわざるをえない。Aの事例は、全般的に皮相的な体験様式が目立っており、人格の統合性という点では皮相的なレベルで仮初めの安定を維持しているとも言える。また各機能の連動や統合が不全で、機能の働き方を束ねる上位機能の弱さが指摘できる。一方Bの事例では、高水準の機能が見られる一方で、機能水準の変動が見られ、諸機能の統合も状況によって変動する不安定さを持っているように思われる。また、欲動の認知、自己像など体験の次元におけるアンバランスが顕著である。

ここで両事例の自我機能を、病態水準という点からみると、どのようなことが言えるであろう。まず、事例Bであるが、創造的資質を持ちながら、刺激の侵入などの要因によって、自我の機能水準が変動しやすく、また精神内界には人格に未統合な欲動を有している。また、それに対する防衛の努力によって、心的エネルギーが消耗されている。こうした点から事例Bは、いわば神経症水準の自我状態にあると云うことができよう。

事例Bの自我状態がおおよそ神経症水準にあるとすると、事例Aはどの程度のレベルにあるのであろうか。Greenacre (1950)の指摘にはじまって、行動化傾向は前言語的体験 (pre-verbal experience) との関連で論じられるようになっており、その点では近年研究の盛んな境界例患者との比較に関心が持たれるところである。馬場 (1983)は、境界例患者20例のロ・テストのプロトコルを集め反応の特徴を分析している。その中で馬場は、主観的な意味付けの過剰さが境界例患者の一般的反応特徴であるとしながらも、一部の水準の低い境界人格患者に、個人の心的内容をまったく反映せず、外界把握が単純になりすぎた反応が多く見られたことを報告し

ている。そして、反応の解釈として、言語表現力や観念世界の発達が未熟なため、攻撃性や怒りが分裂・排除されるとともに、外界からの自閉的なひきこもりを示しながらも積極的な思考歪曲へと発展しないという点が指摘されている。こうした特徴は、本事例 A の反応特徴とかなり一致する点があり、事例 A の病態水準を敢えて設定するならば、一部の境界例患者との類似性が指摘できるのではなかろうか。

VI 総合的考察

以上、2つの窃盗非行の事例を取り上げ、両事例の行動化様態の違いについて検討するとともに、ロ・テストを用いて両者の自我機能を比較してきた。最後に行動化の様態と人格構造との関連について、ロ・テストにみられた自我機能といった側面に限られるものの、若干の考察を加えておく。

両事例の行動化様態の違いは、すでに述べたように、非行行動が無意識の欲動や葛藤をどの程度反映しているのかという点から見ることができる。事例 A の非行は欲動や葛藤が直接影響するものではない常習化した行動の反復であるのに対し、事例 B の非行は欲動や葛藤に強く支配されている。この違いは、非行行動が担う心理的な意味やメッセージ性という角度から見ることもできる。事例 B の非行には、両親という依存対象に対するメッセージ性が含まれるのに対して、事例 A ではそうしたメッセージ性はほとんど感じられない。行動にメッセージ性が含まれるということは、メッセージを伝える対象の存在を前提としており、その意味では、行動化が対象関係の文脈の中で生じているのか否かという問題に言い換えることも可能である。このように見てくると、しばしば精神分析学内部でなされる、治療の内か外かという区別は、行動化の様態を分類する基準としては相対的なものと考えられる。治療状況への反応として生じる行動化とは、対象（治療者）との（転移）関係の文脈の中で生じる行動に他ならないからである。行動に含まれるメッセージ性、あるいは行動化の生じる文脈という観点を取ることによって、行動化の様態を分類するより一般的な基準を設定することが可能となる。

相手が治療者であれ家族であれ、必要な対象関係が基本的に成立しているということは、それ自体が自我の強さを示す一つの指標である。事例 A と B の行動化様態の違いには、その点ですでに自我機能評価のための資料が含まれているのである。ロ・テストの結果は、それを裏打ちするものとなっている。事例 A では対象や環境との表層的な関係、自己の葛藤や欲動を内的に体験する能力の乏しさが示されており、A の行動化様態の特徴とまさに一致する結果と言える。また、欲動や葛藤を内的に体験することが難しいということは、衝動が精神内界の体験として迂回することなく、直接行動表出へと向かいやすいことを意味しており、欲求遅延機能の不全、行動化傾向の高さが A の本質的な問題であることを示している。

行動化の様態と人格構造上の問題を合わせて考えることによって、非行者に対する処遇の指針と予後の見通しについても、有用な情報が得られるものと思われる。A の自我機能の全般的な水準の低さは、発達的にみてもかなり早期に根を持つ対象関係の障害を疑わせるものであり、治療の難しさを予想させるものである。おそらく現時点の非行の動機を、A の内省報告に沿って再構成しようと努力しても、それはあまり意味をなさないであろう。むしろ、治療的にかかわる

上で焦点となるのは、健全な自我発達を促す環境をどのように設定し、対象関係の基本的能力そのものの再建を治療場面でどう実現させ得るかであろう。自我機能評価はこの点の困難さを如実に示している。一方事例 B においては、非行行動の中に含まれる意味やメッセージをいかに汲み取り、いかにそれを B 自身や彼の家族とともに受けとめていけるかが、治療を進める上での一つのポイントとなろう。非行行動自体が治療の目標を暗示しているという点では、B の非行にはすでに前進的 (progressive)、あるいは発達促進的な要素が含まれているとも言える。

本論文の結果はあくまでも 2 事例の比較に基づくものであり、行動化の様態と自我機能の特徴との間に、単純な対応関係を想定することは危険である。非行行動の様態としては類似性が見られても、背景となる人格特徴はさまざまであろうし、その逆も考えられる。また、非行の常習化についてみれば、本論文では扱わなかった集団や組織との関係の次元も深く関わりを持っており、一元的な見方を許さないものである。しかしながら本論文で示された結果は、行動化の様態に注目することによって、非行という幅広い概念をより分化して捉えることができ、また人格構造との関連をみることによって、より力動的な理解が広がることを示唆するものと思われる。

— 注 —

- 1) 安倍の分類は、反社会的集団や組織との関わりが強調されており、本事例の非行性進展のプロセスをあてはめるには、やや視点が異なる面がある。
- 2) これは、Bowlby, J. (1946) の母性剝脱 (maternal deprivation) 理論と共通する面が多いが、Winnicott は、それをより対象関係論的な観点からの表現していると言える。
- 3) 同じ窃盗行為でも、事例 B のスリが対人場面での非行であるのに対し、事例 A の車上盗が非対人場面で行なわれる非行であることも、こうした点と無関係ではなからう。

— 文 献 —

- 安倍淳吉 1974 犯罪心理学研究法 安倍淳吉他 (編) 心理学研究法 誠信書房。
馬場禮子 (編著) 1983 境界例 ロールシャハテストと精神療法 岩崎学術出版社。
Bellak, L., Hurvich, M., & Gediman, H. K. 1973 *Ego function in schizophrenics, neurotics and normals: Systematic study of conceptual, Diagnostic and therapeutic aspects.* New York: John Wiley & Sons.
Blos, P. 1962 *On adolescence.* New York: The Free Press of Genoe.
Erikson, E. H. 1959 小此木啓吾 (訳) 1973 自我同一性 誠信書房。
Freud, A. 1968 On Acting Out, *International Journal of Psychoanalysis*, 49, 165-170 佐藤紀子他 (訳) 1982 行動化 アンナフロイト著作集 10 児童分析の訓練—診断および治療技法一、岩崎学術出版社, Pp 81-94.
Freud, S. 1914 小此木啓吾 (訳) 1969 想起, 反復, 徹底操作 フロイト著作集 VI 人文書院, Pp 49-58.
Freud, S. 1916 佐々木雄二 (訳) 1969 精神分析的研究からみた, 二, 三の性格類型 フロイト著作集 VI, 人文書院, Pp 114-136.
川畑直人・河合弘靖 1987 非行少年の平凡反応に関する研究 ロールシャハ研究 vol. 31, 41-56.
Friedlander, K. 1947 懸田克躬 (訳) 1953 少年不良化の精神分析—理論・ケース=スタディ・治療—みすず書房。
Greenacre, P. 1950 General problems of acting out, *Psychoanal. Quart.*, 19, 455-467.
Hartmann, H. 1936 Rapaport, D. (Trs.) 1958 *Ego psychology and problem of adaptation.*

- London: Imago Publishing Co. LTD.
- 柏熊岬二 1967 犯罪予防の理論と技術, 一粒社.
- Klopfer, B., Ainsworth, H. D., Klopfer, W. G. & Holt, R. R. 1954 *Developments in the Rorschach Technique. I: Technique and theory.* San Diego: Harcourt Brace Jovanovich, Publishers.
- Rapaport, D., Gill, M. M. & Schafer, R. 1968 *Diagnostic psychological testing,* Connecticut: International University Press.
- Redl, F. & Wineman, D. 1957 *The aggressive child,* Free Press.
- 斉藤久美子 1990 自我とパーソナリティ理解 小川・詫摩・三好(編) 臨床心理学体系第2巻
パーソナリティ 金子書房 Pp 108-150.
- Winnicott, D. 1965 牛島定信(訳) 1977 性格障害の精神療法 情緒発達の精神分析理論 岩崎学術出版社, Pp 237-254.